様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：３３９２３
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５２０３２４

研究課題名（和文）商業化されたセクシュアリティー十九世紀初期イギリス女性詩人たちと古典文学の受容

研究課題名（英文）Commercialized Sexuality: The Early Nineteenth-Century British Women Poets and the Reception of the Classics

研究代表者
川津　雅江（KAWATSU, Masae）

名古屋経済大学・法学部・教授

研究者番号：３０２７８３８７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：ヴィクトリア朝時代の理想的女性は、「家庭の天使」という言葉で端的に表現されるように、天使的で純粋無垢であるとされた。本研究は、そうした女性の脱性化の動きが19世紀初期の女性作家たちにおいてすでに始まっていたことを、古典文学の受容の視座から考察した。とりわけフェリシア・ヘマンズやレティシア・エリザベス・ランドンのような女性詩人がオウィディウスの描くサッポーを大衆化し、商業化していく過程は、女性の脱性化の言説が当時の社会や文化に深く浸透してゆく過程と軌を一にする。両者の有機的な関係を検証することによって、19世紀初期における女性のセクシュアリティの商業化の実態を解明した。

研究成果の概要（英文）：The ideal woman in the Victorian era was expected to be angelic, innocent and chaste, as clearly indicated in the popular term “The Angel in the House.” The current research examined women writers in the early nineteenth century from the viewpoint of the reception of the classics to illustrate that their works had already shown a tendency to desexualize women. The way women poets such as Felicia Hemans and Letitia Elizabeth Landon, in particular, popularized and commercialized Ovidian Sappho corresponded to the way a discourse on female desexualization was spreading into British society and culture at that time. A close examination of the correlation between women poets’ treatment of Ovidian Sappho and the prevailing discourse of female desexualization revealed the actual condition of the commercialization of female sexuality in the early nineteenth century.

研究分野：英文学

キーワード：英文学　西洋古典　セクシュアリティ　ジェンダー

１．研究開始当初の背景

本研究は、従来フェミニズムやジェンダー研究で看過されてきたセクシュアリティを批評の視座に入れる国内外で最新の研究動向に沿うものであると同時に、国内外でこれまで主たる考察の対象になっていなかった、19 世紀初期のイギリスにおける古典文学の受容と、女性作家たちのセクシュアリティの言説の関係に焦点をあてるものである。欧米では、ミシェル・フーコーに端を発したセクシュアリティ研究が 1980 年代頃から社会学や歴史学や文学の分野で盛んに行われはじめ、相当な成果を挙げている。ジェンダーとセクシュアリティは不可分の関係にあるが、両者の関係についての検討も、異性愛中心から同性愛を視野に入れた観点へと移り、さらに、19 世紀末以前には性の欲望の認識や同性愛行為はなかったとするフーコーの議論に対する反論として、それより以前の時代における男性の同性愛研究に続き、西洋諸国で唯一女性同性愛者の罰則規定がなかったイギリスにおける女性同性愛研究もなされるようになった。一方、日本においては、近年では欧米と同じように女性の視点を包括したジェンダーの視点の研究やジェンダー構築の過程を解明する研究が目立つようになってきたが、セクシュアリティ研究に関しては社会学の分野に比べて文学は立ち遅れており、クイア理論に依拠して 19 世紀後半以降の文学を考察する研究にとどまる傾向があった。このような国内外の研究の現状を鑑みるならば、本研究者がここ 8~9 年間になしてきた 18 世紀イギリスにおける女性同性愛の様々な表象についての研究は、欧米の研究動向に沿うものであったと同時に、国内では先駆的であったと言える。

本研究はこれまで研究代表者がなしてきた 18 世紀におけるサッポーの詩の受容史研究を出発点とし、それをさらに発展させて、精緻な分析の対象をオウィディウス、マルティアリス、ユウェナリスなど、性愛や同性愛についての言説を多く含む男性古典作家のテクストに拡大し、考察する時代を 19 世紀初期に限ったものである。従来のイギリスにおける古典文学の受容研究では、サッポーについては 1990 年代から盛んに行われはじめ、相当な成果を挙げているが、男性古典作家についての包括的な受容研究はほとんどないと言ってよい。しかしながら、18 世紀からロマン主義時代にかけてのイギリスにおいて、プラトンの『饗宴』や『パイドロス』、オウィディウス『女主人公たち』や『変身物語』、ウェルギリウスの『牧歌』、マルティアリスの『エピグラム』、ユウェナリスの『諷刺詩』など同性愛や両性愛に関連するテクストが幾度となく英訳され、セクシュアリティ観の形成に複合的に関与していることがわかった。また、当時の古典文学の英訳は古典語の原語に忠実というよりも、意識的・無意識的な誤訳が施されて社会に流通することが多く、そうした誤訳によるセクシュアリティの言説の流布自体に性政治学が働いていると考えられた。これらの知見の結果、本研究課題に着目した。

２．研究の目的

本研究は、西洋古典の英訳におけるセクシュアリティの言説の受容を大衆的文学市場におけるセクシュアリティの商業化と関連づけて多角複合的に考察するものである。特に、オウィディウスのテクストの誤訳などによってもたらされた女性の脱性化の現象に的を当て、19 世紀初期において商業的に成功した女性作家たちがそうした女性のセクシュアリティをいかに意図的に描き、大衆化していったかを解明することを目的とする。研究期間内に解明するのは、以下の 3 点である。

(1)　古典作家オウィディウス、マルティアリス、ユウェナリスの作品のイギリス・ロマン主義時代における英訳を、現語の内容と比較対照しながら詳細に分析し、そこに潜んでい

る恋愛やセクシュアリティ観、あるいはジェンダー・バイアスやセクシュアリティ・バイアスなどの性政治学を明らかにする。上記古典作家のテクストの主たる英訳者としては、ウィリアム・ギフォード、ジョージ・ゴードン・バイロン、トマス・ムーアなど文学史でなじみの作家の他、『ギリシャ主要詩選集翻訳書』(1806)を出版したロバート・ブランドのように古典学専門家も数多くいる。本研究では、それらのテクスト分析とともに、訳語の歴史的推移、変容なども検証する。また、同性愛に関する古典文学とも関わりがある、ジェレミー・ベンサムの「ペデラスティー論」(1785)、P・B・シェリーの「『愛』のテーマに関する古代ギリシャ人の風習論」(1818 作)などの論文も考察する。

(2)　19 世紀初期の女性作家たちのうち、とくに大衆的文学市場で活躍したヘマンズとランドンの二人の女性詩人に焦点をあてて、セクシュアリティ形成の視点から、彼女たちの作品分析を詳細におこなう。また、彼女たちの商業的成功の野望とセクシュアリティの言説の関連を検証するために、当時の文学市場の流行の実態を新聞・雑誌・出版社の宣伝目録などを探る。

(3)　以上の個別実証的な研究成果を踏まえ、19 世紀初期における西洋古典文学の英訳版の言説の社会的文化的影響力の全貌と、女性作家たちによる女性のセクシュアリティの商業化の過程とのつながりを明らかにする。

３．研究の方法

本研究は、研究代表者が 3 年間という期間にわたって、19 世紀初期における西洋古典文学の英訳テクストと女性作家たちのテクストのそれぞれのセクシュアリティの言説を領域横断的角度から考察した。研究目的を達成するためにとった方法は以下の 3 点である。

(1)　資料収集

本研究は主に一次資料研究によって行われた。そのため、研究初年度から、本研究に関連する基本的資料・文献・刊行物などを精力的に収集した。特にイギリスの 18 世紀から 19 世紀に英訳出版された古典作家の著作のうち、オウィディウス、マルティアリス、ユウェナリス関連を収集した。またイギリス女性作家のうち特にヘマンズとランドンの著作集や評論、およびサッポー的な即興詩人を描き、同時代のヨーロッパ中に多大な影響を与えたフランスのスタール夫人関連の書籍を購入した。ヘマンズとランドンの文学市場における位置を把握するために必要な 19 世紀初期の新聞・雑誌・印刷業に関する論文や、19 世紀初期のアニュアルもしくはギフトブックにおける女性作家関連の記事や批評など貴重文献・一次資料に関しては、大英図書館で筆写、PDF での電子ファイル、ハードコピーの形で収集した。

(2)　資料の精読・分析とデータベース化

本研究目的欄に挙げた３点を解明するために、収集した広範な領域にまたがる資料・文献・刊行物などを精読・分析し、データベース化して検索可能なかたちに変え、本研究の遂行が容易になるよう計った。これらの作業は本研究の研究期間中最も多くの時間を費やした。

(3)　研究成果の公表

研究成果の一部については、随時、国内外の主要学会において口頭発表するとともに、論文を学会誌や所属機関の紀要、共著などで公表した。そして口頭発表時やその他の機会に、イギリス文学・文化・フェミニズム思想の研究者たちと意見交換し、適切な指導・助言などを受けることによって、本研究の精度を高めるのに努めた。

４．研究成果

本研究の主な成果としては、以下の４点の内容に大別される。

(1)　西洋古典文学におけるセクシュアリティの言語の受容

18 世紀末のユウィエナリスの『諷刺詩』の

ウィリアム・ギフォードによる英訳の言説が19世紀初期のアン・リスターの日記中で女性同性愛を巡る下世話な世間話にまで広がっていたように、古典における男性同性愛の言説が多方面の分野においてあらゆる同性間の愛に援用・流用されていたことが鮮明になった。成果の一部として、イギリス女性史研究会のシンポジウム「揺らぐ境界−—セクシュアリティとジェンダー」では、「ロマン主義時代における女性同士の愛、ジェンダー、セクシュアリティ」のタイトルで、ロマン主義時代における女性間の愛の表象を歴史的観点から考察した。また、論文「アン・リスターの隠れたセクシュアリティ」では、アン・リスターの日記を読み解き、彼女が学んだオウィディウス、マルティアリス、ユウェナリスなどの西洋古典文学におけるセクシュアリティの言説が、女性同性愛者としての自己像の形成に対抗的に働いたことを明らかにした。イギリス女性史研究会 Newsletter に掲載した論文「女性同士の友情を超えた愛はセクシュアルか？」では、ロマン主義時代の女性同士の愛について語るとき、セクシュアルが意味することについての問題を提起した。

⑵　オウィディウスのサッポーの受容と 19 世紀初期女性詩人

名古屋大学英文学会第 52 回大会における招待講演で、18 世紀から 19 世紀四半世紀までのオウィディウスの「パオーンに宛てたサッポーの手紙」に基づくサッポーの投身神話の言説と絵画的表象の変容を自殺観・感受性観・セクシュアリティ観の観点から分析した。これにより、本研究の中心をなすヘマンズとランドンの作品における女性の愛と死と詩的名声のテーマの歴史的位置づけが明らかになった。また、19 世紀初期の女性の脱性化の動きを 18 世紀以来のオウィディウスのサッポーの受容史のコンテクストの中で捉えなおすことができた。この分析結果の知見を発展させた論文「飛ぶのは怖くないーサッポーの愛と自殺とジェンダー」は名古屋大学英文学会誌『IVY』に査読を経て掲載された。イギリス・ロマン派学会における口頭発表「愛の商品化−—レティシア・エリザベス・ランドンと L. E. L. と「サッポー」」では、ランドンがいかに L.E.L.として異性愛者としてのサッポー像を売り出すことによって人気を博したのかを論じた。その知見を発展させて、イギリス湖水地方のライダルで開催された第 43 回ワーズワス国際学会における口頭発表 “Love as a Commodity: Letitia Elizabeth Landon and ‘Sappho’”では、ランドンのいわゆる「売れた」恋愛詩がバイロンやムーアによる古典の英訳の言説を否定したうえで成り立っていたこと、そして彼女の作品に繰り返し出現するサッポー的な「報われぬ愛」のテーマは当時大流行したアニュアルやギフトブックの贈答先である女性たちにとって「安全な愛」を意味したことを明らかにした。ここにおける質疑応答やフロアーからの意見を踏まえて加筆・修正した英語論文は、イギリス・ロマン派学会誌『イギリス・ロマン派研究』第 39・40 合併号に査読を経て採用され、平成 27 年 11 月に発行が確定している。

⑶　本研究テーマに関連した研究成果

ロマン主義時代のジェンダー・セクシュアリティ観を知る規範的な作家の一人であるメアリ・ウルストンクラフトに関する 19 世紀から現代までの批評論文集の書評を日本英文学会誌英文号に公表した。また、イギリス・ロマン主義時代のジェンダー、感受性観、道徳観の点において本研究に関連する口頭発表を日本ジョンソン協会第 45 回大会シンポジウムにおいておこなうとともに、３点の論文を紀要や共著に公表した。

⑷　研究成果報告書

最後に、3 年間の研究実績の総括として、2015 年 3 月 31 日に研究成果報告書(A4 版、

和文、全 63 ページ)を発行し、18 世紀から19 世紀初期におけるオウィディウスの「パオーンに宛てたサッポーの手紙」の英訳版の社会的文化的影響力と、19 世紀女性作家たちによる女性のセクシュアリティの商業化の過程とのつながりを多角的に考察した。この報告書は後述する発行予定の研究書の中核をなす。

本研究の研究成果は意義あるものとして学会で評価されてきた。本研究は近代イギリスにおける古典の受容研究に貢献するとともに、セクシュアリティ研究に新たな複合的視点を確立することができたと考えている。

今後の展望としては、19 世紀はじめの女性詩人たちと比較するために男性詩人たちによる古典文学のセクシュアリティに関する言説の分析を早急に終了し、本研究の成果をより一層深化し発展させた研究書をまとめる予定である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　6　件）

① KAWATSU, Masae, “Love as a Commodity: Letitia Elizabeth Landon and ‘Sappho’” 『イギリス・ロマン派研究』、査読有、39・40 合併号、2015 年 11 月発行確定

②KAWATSU, Masae, Review: Jane Moore (ed.), *Mary Wollstonecraft* (Farnham: Ashgate, 2012)、*Studies in English Literature*、査読有、55 号、2014、pp. 123-29

③川津雅江、「飛ぶのは怖くないーサッポーの愛と自殺とジェンダー」、『IVY 』、査読有、46 巻、2013、pp.1−22

④川津雅江、「アン・リスターの隠れたセクシュアリティ」、『人文科学論集』、査読無、92 号、2013、pp.37-50

⑤川津雅江、「女性同士の友情を超えた愛はセクシュアルか？」、『女性・ジェンダー・歴史』、査読無、10 号、2013、p.4

⑥川津雅江、「女性と動物－トマス・テイラー『動物の権利の擁護』(1792)」、『人文科学論集』、査読無、90 号、2012、pp.41−54

〔学会発表〕（計　5　件）

①KAWATSU Masae, “Love as a Commodity: Letitia Elizabeth Landon and ‘Sappho’”
The 43rd Wordsworth Summer Conference、2014 年 8 月 7 日、 Rydal（UK）

②川津雅江、「飛ぶのは怖くないーロマン主義時代の愛と自殺とジェンダー」、名古屋大学英文学会第 52 回大会、2013 年 4 月 20 日、名古屋大学（愛知県名古屋市）、招待講演

③川津雅江、「ロマン主義時代における女性同士の愛、ジェンダー、セクシュアリティ」、イギリス女性史研究会第 19 回研究会、2012 年 12 月 16 日、成蹊大学（東京都武蔵野市）、招待講演

④川津雅江、「愛の商品化—レティシア・エリザベス・ランドンと L. E. L. と「サッポー」」、イギリス・ロマン派学会第 38 回全国大会、2012 年 10 月 21 日、熊本大学（熊本県熊本市）

⑤川津雅江、「動物愛護物語と教育・道徳の感受性」、日本ジョンソン協会第 45 回大会、2012 年 5 月 28 日、アルカディア市ヶ谷（東京都千代田区）

〔図書〕（計　2　件）

①川津雅江　他、開拓社、『十八世紀イギリス文学研究—第５号共鳴する言葉（ワード）と世界（ワールド）』、2014、307（200-15, 284-85）

②川津雅江　他、彩流社、『境界線上の文学』、2013、259（121−37）

〔その他〕
ホームページ等
商業化されたセクシュアリティ
http://sunrise-n.com/kawatsu/

６．研究組織

⑴研究代表者

川津　雅江　（KAWATSU, Masae）

名古屋経済大学・法学部・教授

研究者番号：３０２７８３８７